待つ（太宰　治）

省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎えにまいります。誰とも、分からぬ人を迎えに。

市場で買い物をして、その帰りには、必ず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰を下ろし、買い物籠を膝に乗せ、ぼんやり改札口を見ているのです。上り下りの電車がホームに到着するごとに、たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、一様に怒っているような顔をして、パスを出したり、切符を手渡したり、それから、そそくさと脇目も振らず歩いて、私の座っているベンチの前を通り駅前の広場に出て、そうして思い思いの方向に散って行く。私は、ぼんやり座っています。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。胸が、どきどきする。考えただけでも、背中に冷や水をかけられたように、ぞっとして、息が詰まる。けれども私は、やっぱり誰かを待っているのです。いったい私は、毎日ここに座って、誰を待っているのでしょう。どんな人を？

いいえ、私の待っているものは、人間でないかもしれない。私は、人間を嫌いです。いいえ、怖いのです。人と顔を合わせて、お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を、いい加減に言っていると、なんだか、自分ほどのうそつきが世界中にいないような苦しい気持ちになって、死にたくなります。そうしてまた、相手の人も、むやみに私を警戒して、当たらず障らずのお世辞やら、もったいぶったうその感想などを述べて、私はそれを聞いて、相手の人のけちな用心深さが悲しく、いよいよ世の中が嫌で嫌でたまらなくなります。世の中の人というものは、お互い、こわばった挨拶をして、用心して、そうしてお互いに疲れて、一生を送るものなのでしょうか。私は、人に逢うのが、嫌なのです。だから私は、よほどのことでもない限り、私のほうからお友達の所へ遊びに行くことなどは致しませんでした。家にいて、母と二人きりで黙って縫い物をしていると、いちばん楽な気持ちでした。けれども、いよいよ大戦争が始まって、周囲がひどく緊張してまいりましてからは、私だけが家で毎日ぼんやりしているのが大変悪いことのような気がしてきて、何だか不安で、ちっとも落ち着かなくなりました。身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ちなのです。私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまったのです。

家に黙って座っていられない思いで、けれども、外に出てみたところで、私には行くところが、どこにもありません。買い物をして、その帰りには、駅に立ち寄って、ぼんやり駅の冷たいベンチに腰かけているのです。どなたか、ひょいと現れたら！　という期待と、ああ、現れたら困る、どうしようという恐怖と、でも現れたときにはしかたがない、その人に私の命を差し上げよう、私の運がそのとき決まってしまうのだというような、諦めに似た覚悟と、その他さまざまのけしからぬ空想などが、異様に絡み合って、胸がいっぱいになり窒息するほど苦しくなります。生きているのか、死んでいるのか、分からぬような、白昼の夢を見ているような、何だか頼りない気持ちになって、眼前の、人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまうのです。ああ、私はいったい、何を待っているのでしょう。ひょっとしたら、私は大変淫らな女なのかもしれない。大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設けて、自身の軽はずみな空想を実現しようと、何かしら、よい機会をねらっているのかもしれない。ここに、こうして座って、ぼんやりした顔をしているけれども、胸の中では、不埒な計画がちろちろ燃えているような気もする。

いったい、私は、誰を待っているのだろう。はっきりした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争が始まってからは、毎日、毎日、お買い物の帰りには駅に立ち寄り、この冷たいベンチに腰をかけて、待っている。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいったい、私は誰を待っているのだろう。旦那さま。違う。恋人。違います。お友達。嫌だ。お金。まさか。亡霊。おお、嫌だ。

もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの。何だか、分からない。たとえば、春のようなもの。いや、違う。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やっぱり、違う。ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍らせて待っているのだ。眼の前を、ぞろぞろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠を抱えて、細かく震えながら一心に一心に待っているのだ。私を忘れないでくださいませ。毎日、毎日、駅へお迎えに行っては、むなしく家へ帰ってくる二十の娘を笑わずに、どうか覚えておいてくださいませ。その小さい駅の名は、わざとお教え申しません。お教えせずとも、あなたは、いつか私を見かける。